

アニミズム再考

著者	梅原 猛
雑誌名	日本研究 : 国際日本文化研究センター紀要
巻	1
ページ	13-23
発行年	1989-05-21
その他の言語のタイトル	Animism Reconsidered
URL	http://doi.org/10.15055/00000947

アニミズム再考

梅原 猛

日本の神道や仏教をアニミズムという言葉で特徴づけたり、仏教や神道から抗議を被るに違いない。なぜなら現代の学界の常識によれば、アニミズムは原始宗教の特徴であり、従って日本の仏教や神道をアニミズムと規定することは、日本の神道や仏教は原始宗教の段階にとどまっているものであり、本当の宗教である高等宗教の段階に達していないと思われるからである。従って今まで日本の宗教、すなわち神道や仏教は自らをアニミズムと呼ばれることを恥じ、そして自らがアニミズムと違った別の原理に従っていると主張してきた。

しかし、私は結局、日本の神道や仏教はアニミズムの原理によっていると思う。そしてアニミズムの原理によっていることは決して恥ずべきことではない。アニミズムは原始宗教の原理であることは、タイラーなどが主張するとおりであるが、それは人類の世界観とし

て必要欠くべからざるものであり、アニミズムを失った高等宗教は、アニミズムを失ったことよって重大な思想的危機に立つと私は思うのである。

アニミズムとは一体何か。アニミズムとは、動物あるいは植物、あるいは無機物にも人類と共通の霊が存在し、その霊によって、全ての生けるものは生きるものになるといふ思想であると言えよう。霊は自然の至る所に存在し、そして生きているものを生きているものたらしめるのである。それは、人間ばかりか動植物、あるいは自然そのものも生かす原理である。

アニミズムは、自然の至る所にそれを生かす霊を見る思想である。その自然の霊のうちで最も強いのは樹木の霊である。なぜならば、樹木の霊は、小さな種から幹を出し、枝を出し、葉を出し、やがて大木に成長し、しかもその大木は樹齢何百年と生き続けるからであ

る。アニミズムは、まずこうした樹木崇拜の形を取る。

次に、アニミズムは動物崇拜の形を取る。なぜなら、ある動物はとても人間の及び難い力を持つからである。人間はそういう力を持つ動物にあこがれ、その動物の力を自分のものとしようとす。蛇、牡牛、ライオン、虎、熊などがそういう力を持つ動物として崇拜の対象となる。そこから半神半獣やさまざまな超人間的な風貌を持つ神が創られてくるのである。

それに自然現象もまた、生きた霊の活動にすぎないものと考えられる。太陽も月も山も川も風も雨も雷もやはり超人間的な力を持つ神であり、それは動物や植物と同じく霊によって支配される。

こういう世界観から見れば、全世界はそれぞれの生を生たらしめるさまざまな霊の闘争の場所となる。人間の霊も、こういう熾烈な霊相互の闘争の中に存在する一つの霊にすぎないのである。

アニミズムの思想のもう一つの特徴は、霊の、やはり身体からの脱離とその復活という思想であろう。霊は、動物の場合でも植物の場合でも、死によって元の肉体から遊離し、しばらく霊の故郷である天に滞在し、そしてまた新しい肉体をまとして、この世に再生するのである。アニミズムはそのような霊の死・復活の原理がなかったら成り立たない。動物はもちろん、そういう死・復活の原理に従って、また甦るのである。甦るといのは文字どおり黄泉の国から帰ることであり、復活を意味する。

こういう世界観において、生というものは全て再生なのである。

決して新生などというのはいりえない。生は全て一度あの世へ行った魂が、新しい身体をまとしてこの世へ帰って来たものである。すなわち全て甦りなのである。植物の場合も同じであろう。植物の寿命は実にさまざまであり、一年で枯れるものもあるが、数百年生き続けるものもある。その生命の長さはさまざまであるが、それはやはり死んで、枯れて、また新しい生命となって甦るわけである。古代人は自然現象を死・再生のそういう甦りとして理解していた。

その甦りの最もはっきりした例は太陽である。太陽は、夜、死の国へ行つて、朝、死の国から復活する。この太陽の運動に従つて、われわれも夜寝て、朝目覚めるのである。夜寝るといふことは、われわれは一旦死ぬことである。「死は永久の眠り」と人は言うが、逆に言うと、眠りは人間の生の中に一時的に侵入した死なのである。そういう生の中に侵入した短い死を人間は毎日経験しなくてはならないのである。アニミズムの世界観とは、そういう人間を含む動物と植物及び天然現象を全て霊としてとらえ、その霊の天と地、すなわちあの世とこの世の間の永久の循環によって、宇宙の運動を説明しようとする哲学であるといつてよいであろう。

アニミズムをこのようなものとして特色づけるとき、日本の神道は全くアニミズムであると言わねばならない。日本の神道は、史上において大きな変革を二度経験した。一度目は、七―八世紀の変革

である。二度目は十九—二十世紀における変革である。二つの変革は、二つの時代における新しい国家建設というものと相応する。一度目は隋・唐にならって律令国家の建設であり、二度目は欧米にならって近代国家の建設である。その二度にわたる国家建設の中で、神道は大幅に改造される。それは当然、歴史的要求によって国家主義的に改造されたわけである。一度目の神道の改造について私は拙著『神々の流竄』などで語った。ここで新しい神道が神代からの古い伝承として語られるが、それは祓・禊の神道であった。つまり律令国家建設に対して邪魔な人間は祓われ、つまり追放され、祓われない人間は禊によって改心されなければならないというのである。

この「中臣神道」と言われる神道は、おそらく道教などの影響によって成立したものであるが、決して古い伝統そのままであるといえない。

また明治以後の日本の神道の主流を成した国家神道も祓・禊の神道以上に古い伝統によるものではない。それは、江戸時代に成立した国家主義的な平田神道を当時ヨーロッパでも流行した国家主義によって再構成したにすぎない。国家を神としたり、国家のために死んだ人々のみを排外的に祭る。そういう考え方は日本の伝統にはない。むしろ己が生きていくために犠牲にした敵を祭り、その魂を鎮魂することが、律令神道においてすら最も重要な宗教的課題であったのである。

この二つの国家神道を差し引いて日本の神道の源流を求めたらどういうことになるのか。私は、アニミズムの思想しか残らないのではないかと思う。この日本の源流を成す神道を明らかにするにはどうしたらよいか。私は、それをアイヌと沖繩の宗教によって考えるのが一番よいのではないかと思う。なぜなら、仏教は日本の旧中心部を通じて侵入した。それで大体日本の旧中心部は仏教に侵されたわけである。日本の辺境、北と南には、まだ仏教に侵されず伝統的な宗教を持ち続けているところがある。それが私にはアイヌと沖繩ではないかと思われる。『古事記』や『日本書紀』や祝詞にはもちろん一面、律令神道によって深く影響を受けているが、また一面、それ以前の古代神道の名残をとどめている。そして柳田や折口が明らかにした日本の民間宗教にもそういう古代宗教の残存がある。アイヌの宗教や沖繩の宗教を古代研究及び民俗研究の成果と考え合わせ、それを西洋の学者による多くの原始宗教の研究と照合させて考察するとき、ほぼ日本の仏教移入以前、律令神道成立以前の古代神道の形が明らかになってくると思う。

日本の古代神道には、樹木崇拜という思想がある。神社には必ず森がある。かつて縄文時代において日本中は森であった。そして人間は森の中であらゆる生きとし生けるものと共存していた。弥生時代になって日本は農耕社会になった。平地においては森の木は切られて田とされた。しかし神のいる場所である神社には森が残った。

日本人は神のことを一柱、二柱と呼ぶ。それは柱が神であった時代の名残である。正確に言えば、柱は神ではなかった。それは神や靈が行き来する通路であった。数年前に北陸地方で巨大なウッド・サークルの遺跡が発見された。それは直径七十センチから一メートルもあるような栗の巨木が半分に切られ、曲線の部分を内にして、十本サークル状に並んでいる遺跡である。しかもその遺跡には、南側に鳥居のように並べられた二本の柱があった。それはおそらく神社ができる以前の日本の神道の形をとどめているのであろう。柱はやはり天と地を結ぶもの、神や靈が天と地の間、死の世界と生の世界の間を往復するものであろう。そしてサークルは循環の理を示すものであるに違いない。

しかも、そうした神はやはり木に宿るのである。木の崇拜はアイヌの宗教においても強く残っている。木はアイヌの言葉で「シランバカヌイ」、地を支配する神として高く尊敬される。アイヌでは病人が出ると、大樹のもとに連れて行き、そしてその聖なる木の霊の力によって病気の癒されんことを祈るのである。この「シランバカヌイ」というのは、例の柳田国男が着目した「オシラサマ」にあたるものである。神道はその出発において、木の崇拜であり、柱の崇拜であったことは、伊勢神宮建造の最初が心の御柱の建造であり、諏訪の御柱祭が、霧ヶ峰や八ヶ岳から巨大な柱を取ってきて神社の周囲に立てることであることによってもわかる。

神道に動物崇拜の性格が強いことも明らかである。例えば、たいていの神社には神のお使いというものがある。例えば稲荷神社は神のお使いは狐であり、三輪神社は蛇であり、日吉神社は狼であり、北野天神は牛であるという具合である。おそらく、神の使いといわれる動物がもとと神であったのであろう。それが、動物崇拜が恥ずべき宗教になった時に神の座から下り、神の使いということになったのであろう。

アイヌでは「カムイユーカー」と「アイヌユーカー」と二種のユーカーがある。「アイヌユーカー」は文字どおり人間のユーカーで、アイヌの英雄ポイヤウンベが奮戦して、侵入してきた敵の軍を撃退する話である。しかし「カムイユーカー」というのは主人公はカムイ、すなわち神である。その主人公の神というのは、ほとんど動物である。たまたま植物や天体現象であることもある。「カムイユーカー」はただの抒情的な歌ではない。それは、動物と人間との根本的関係を語る教訓詩でもある。

この神を動物とするのは明らかにアニミズムであるが、日本の古代にもこのような動物崇拜のあとがある。蛇のことを古代語で「おかみ」と言うけれど、明らかにそれは蛇が神であった名残である。それは今でも竜神信仰という形で根強く民間に根を張っている。また、狼（オオカミ）というのは明らかに大きな神という意味である。アイヌにおいて狼はカミである熊を支配する最も偉大な神であった

のである。また、地方において鯨のことを「神主」と呼ぶところがあるが、明らかにそれはアイヌの場合と同じく、鯨を神とする考え方であろう。鯨は人間にとって最もよい食料となる海豚を人間に与える神主なのである。動物崇拜は、多く古代人の「入鹿」や「蝦夷」や「馬子」という名前にも見られるが、現代においては、決して中国や韓国にはありえない「虎五郎」や「熊吉」やあるいは「猛」という名においても見られる。

天然現象も神であることは明らかである。日本には、山の神や川の神の力が強い。山の神は「山口の神」という形で、川の神は「水分けの神」という形で祝詞にも現われる。山の入り口は山の神の住所であり、川の分かれるところもまた川の神の住所なのである。その他、太陽の神、月の神、風の神、火の神など自然現象そのものである神が無数に日本にいる。

こうしてみると、日本の神道は、霊が植物にも動物にも天然現象にも存在するという点においてアニズムの特徴を持つが、また、霊の再生、霊のあの世とこの世の絶えざる循環という思想を持つ点においてもアニズムの特徴は強い。

例えば、アイヌの宗教によれば、人間は死んであの世へ行くが、あの世とこの世はあべこべの世界なのである。人間は死ぬと、人間の霊は肉体を離れてあの世へ行くのである。霊が去った肉体は、もう蛇の抜け殻のようなもので、何の意味もない。あの世へ行った霊

は、あの世で祖先に迎えられる。祖先は既にあの世へ行った霊たちである。そこで、祖先たちはほとんどこの世と変わりのない生活を送っている。あの世とこの世とが変わっているのは、この世の人は地面に足をつけて歩いているのに対し、あの世の人は足を上にして逆さまになって歩いているという点においてである。物理学の言葉で言えば、この世は陽子の世界であり、あの世は反陽子の世界であると言えるであろうが、あの世が陽子の世界であり、この世を反陽子の世界であると見ることも出来るのである。あの世の夜はこの世の昼であり、この世の夜はあの世の昼である。あの世の夏はこの世の冬であり、この世の夏はあの世の冬である。このように万事があべこべであることがその違いなのである。

アイヌの人は、葬式を夜の初めに、夕方に行う。それは、夕方に葬式を行えば、朝あの世に着くから、祖先の霊の待っているところに無事着くことができるという思想による。またアイヌの人は、死者に捧げるものに傷をつける。それは、この世で完全なものはあの世で壊れ、この世で壊れたものはあの世で完全になるという思想である。また、アイヌの人は生前住んでいた家に火をつけ、その家をあの世へ送る。この世とあの世との間の使いであり、死者が住んでいた家を焼くことによって、そっくりそのままあの世へ送るという思想による。

こうしてしばらく死者はあの世に滞在するわけであるが、やがて

また帰って来る。結婚して子供ができる。あの世の祖先たちは相談をして、今度誰を帰すかを決めるといふ。あの男はこの世にいる時いいことをしたので、早く帰してやろうという祖先たちの意見がまとまって、その人の霊が送りがえされるといふ。やがて、時が満ちて、子供が生まれて、「ああ、この子はおじいさんにそっくりだ。おじいさんの生まれ変わりだ。」ということになるのである。ここで、全ての生は再生なのである。

このアイヌの「あの世」観は、最近まで日本の本土においても存在している「あの世」観なのである。私は子供の時、着物を左前に着たり、水でお茶をうめたりすると、死人の真似事をするといつて母に叱られた。してみるとやはり、あの世とこの世はあべこべ社会と考えられていたのである。また、日本本土でもお通夜という風習が残っている。やはりそれは夜の初めに行われる。夜の初めに霊をあの世に送れば、朝の初めに着くという思想によるものであろう。また、日本の都は七世紀に至るまで定まらなかったのも、アイヌと同じく、生きている人の住所を焼いて、天に送ったという風習があったからであらう。そして、日本においてもやはり、生は再生であるという思想が強く残っていたのであろう。日本の田舎では、最近まで代々同じ名を名乗ることが行われた。それはやはり魂の甦りという思想によるのであろう。大嘗祭もまた、そういう天皇霊の甦りの祭りであることは間違いない。

このように見ると、二度にわたる国家主義的な変革を越えて、その基にある日本の神道というものを訪ねると、それは全くアニミズムの思想であると言ってよいと私は思う。

仏教が日本に入ってきてさまざまに変容した。もともと仏教は、人間が輪廻の流れから外に出るといふ思想なのである。インドでは輪廻の思想が強かった。それによれば、生きとし生けるものは輪廻の法則を免れることはできない。この世の行いの善悪によって、来世では、人間ばかりかさまざまな動物に生まれ変わってくる。それがバラモン教の確信なのである。釈迦はこの輪廻の法則から自由になろうとしたのである。この世は所詮苦である。あらゆる生きとし生けるものは輪廻を繰り返すが、この世界は天界から地獄まで所詮苦の世界である。釈迦は、この輪廻の流れの外に出ることを熱望した。輪廻の流れの外に出るには、輪廻の基を成す愛執を滅ぼさねばならない。人間が戒律を守り、知恵を磨き、瞑想をすることによって、この愛執を絶ち、涅槃、ニルバーナの境地に入れば、この輪廻の流れを断ち切ることができる。釈迦は考えた。

それがいわゆる原始仏教である。しかしこの原始仏教は、大乘仏教に至って著しく変質する。そういう著しく変質した大乘仏教が、西域や中国を経て日本に入ってきて、また日本的な思想的風土の中で変質する。その変質の過程をつぶさに考察する時間はない。それで、ここでは特徴的な思想を取り上げてみよう。

それは、一つは天台本覚論であり、天台本覚論は十世紀から十三世紀までに天台宗で作られた思想である。その思想は誰によって作られたというわけでもないが、いつの間にか日本仏教の中心思想になってしまった。その思想の合言葉として「草木国土悉皆成仏」という言葉が使われる。福永光司氏によれば、この言葉はもともと中国天台の第九祖荆溪湛然の説であり、道教に由来するものだとと言われるが、まさにそれはいつの間にか日本に移入され、日本仏教の中心思想になってしまったのである。(東洋哲学研究第三十七巻別冊「道教と仏教」)

この「草木国土悉皆成仏」という言葉は、まさにアニミズムの思想そのままである。それは明確な自然崇拜であり、樹木崇拜である。動物崇拜はそこでははっきりと語られていないが、もちろんそこには動物崇拜も含まれるのであろう。

日本の原思想によれば、樹木も動物も自然現象も全て神である。ここで神がただ仏になっただけである。日本人は、人が死ぬと仏になったと言う。本来の仏教から言えば、全ての人が死んで決して仏になるわけではない。仏になることのできるのは、ごく少数の生前厳しい修業をして、輪廻の基をなす愛執を滅した人のみなのである。ところが日本では、全ての人が死ねば仏になると言うのである。ひどい例を使えば、物が壊れた時に「おシャカになった」と言う。どうして物が壊れた時に「おシャカになった」と言うのだろうか。私

はそこにやはり、壊れた土器などを神として葬った古代社会の風習の名残があるような気がしてしかたがない。やはり、壊れたものは死んだ人間と同じように仏になる。そして、人が死んで仏になり、物が壊れて「おシャカになる」と言われるのである。本来の仏教において、人は全て死ねば仏になるわけではなく、ものは壊れて全て釈迦になるわけではない。

この霊のこの世とあの世との間の絶えざる循環の思想を色濃く持っているのは親鸞の思想であろう。親鸞は、自分の思想の特徴は二種廻向にあると語る。二種廻向とは往相廻向と還相廻向である。往相廻向とは、阿弥陀仏の慈悲によってこの世で人間が念仏をすれば必ずあの世、極楽浄土に往生するという思想であり、還相廻向というのは、いったん極楽浄土に成仏した人間が、再びまたこの世へ帰って来るという思想である。阿弥陀経や観無量寿経を読むかぎり、あの世はまさにこの世からはるか遠く離れた極楽世界であり、いったん極楽浄土へ行った人間はもうこの世へは帰ってこない。それがむしろ仏教本来の考え方である。涅槃に入った人間は輪廻の外に出たわけである。輪廻の外へ出た人間は、もう二度と人間世界へ帰って来ることができないはずはない。

しかし、親鸞は再びこの世に帰って来ると言う。なぜ帰って来るのか。それは、大乘仏教の必然であるという。大乘仏教は菩薩の仏教である。菩薩は利他の行を努める人間である。利他の行を努める

人間は、極楽浄土で安穩な快樂生活にふけるわけにもいかず、また悩み苦しむ衆生のいるこの世へ帰って来て、衆生救済に努めねばならない。衆生救済とは、ここでははっきり念仏の行を教えることである、とすれば、いったん極楽浄土へ行った人間は再びこの世に生まれ変わり、念仏の行に励むことになり、そしてまた極楽浄土へ行き、また帰って来る。二種廻向とはこういうことを無限に続けることなのだろうか。

もとよりこの親鸞の考えは、先に私が語った神道の循環思想とは違っている。神道の循環思想は家族単位で甦るのに対し、親鸞の思想は信仰者として甦るのである。そこには祖先崇拜を離れたはつきりした世界宗教の意識がある。しかしそういう普遍的世界宗教の意識は、やがて祖先崇拜の宗教の中に飲み込まれてしまうのである。浄土真宗は存覚において、はっきり祖先崇拜の思想となった。祖先崇拜の教えと混じって、あの世は曖昧なものとなる。あの世は、古い日本神道のあの世でもあるし、仏教の極楽浄土でもある。あの世から人は子孫となって生まれ帰って来るようでもあるし、また信仰者として生まれ帰って来るようでもある。しかしとにかく、両方も帰って来るといふ点においては変わらない。

柳田国男はかつて日本人の信仰の二重性に注意をした。日本人は、本当は死後どこへ行くと考えているであらうか。極楽へ行くと考えているか。お山へ行くと考えているか。極楽はもう二度と帰れない

はずなのに、お盆や正月には死者が帰って来るといふ。死んでお山に行くというのが日本人の実際の信仰で、仏教はうわべの信仰ではないかと考えた。しかし、柳田は気づいてはいなかったが、日本の仏教は、親鸞において甦りの宗教として伝統的な神道と一致したのである。

このようにみると、日本の宗教は、神道はもちろん仏教もアニミズムの影響を強く受けているというより、アニミズムそのものであるということになる。このことは日本の宗教のスキャンダルである。それは結局、日本の宗教がまだ原始宗教の段階にとどまっているということなのだろうか。

確かにそうである。日本の宗教は、神道はもちろん仏教すらアニミズムの段階にとどまっている。しかし、それは決してスキャンダルではない。それはむしろ健康な宗教のしるしなのである。アニミズムを原始宗教の段階にとどまるものと考えるのは、キリスト教を最上の宗教と考え、そこから全ての宗教を判断する見方が根底にあるからである。キリスト教の神は超越神であり、人格神である。超越神、人格神を持つ宗教から見れば、アニミズムは原始宗教にとどまる下級な宗教ということになる。

エホバの神は万物の創造者である。エホバの神は一切を創造した。全てのものを創造した神として、彼は全てのものに超越する。そこで彼は、直接樹木や動物や自然現象が神として崇拜されることを好

まない。それ故に、それは一切のアニミズム的な神を否定する。

また、キリスト教では、神の子イエスの行為と言葉によって、神の意志が示現されるとする。そこではやはり人間が決定的な役割を果たす。人間のみが、神のみ姿を持ち、それは神のみ姿を持つことによって他の動物に優越する。これは著しく人間を重視した宗教と言わねばならない。このような超越的な人格神的な宗教がどのように発生したかは難しい問題である。しかし、アニミズムが狩猟採集社会と関係あるのに対し、こういう超越神、人格神の考え方が農耕牧畜社会と関係があることはまず間違いない。農業牧畜社会の成立とともに、人間の位置が高められるのである。今まで人間と同様に神性を持っていた樹木や動物や自然現象から神性が奪われ、それが一切の存在するものを超越した超越神にさせられ、その超越神から逆に人間のみに神性が分かち与えられるのである。

こういう宗教の構造は、明らかに農業牧畜社会のものなのである。牧畜は人間の動物に対する支配であり、農耕は人間の植物に対する支配である。この人間の動物、植物への支配を最大とする農耕牧畜社会の考えから見れば、それを妨げるさまざまな樹木神、動物神、自然神は、この人間による動物、植物の自然への支配を貫徹するための邪魔物になる。かくてアニミズムは否定され、超越神、人格神が文明の歴史的要求に適應した宗教となる。

このようなことは工業社会になっても変わらない。いや、工業社

会になれば、一層人間の自然支配が進められる。工業社会の思想的原理を与えたデカルトによれば、人間は、理性を持ったエゴとして物質世界に対立する。物質世界は、自然科学的法則によって説明されるべきものである。本来生きてはいないものである自然の法則を知り、その自然を征服することによって、理性を持ったエゴとしての人間の自由と幸福が拡大されるといのが近代哲学、ひいては近代社会の原理なのである。ここではアニミズムというのは、近代文明にとって唯一の善である自然征服を妨げる前近代的な、そしてしばしば迷信的な信仰なのである。

アニミズムを否定した宗教及び哲学によって、自然は人間によって征服された。それが文明というものの必然の方向であった。しかし、その必然の方向が人類の滅亡につながるのではないかとというのが、私の否定し難い不安なのである。そのような滅亡は遠い未来のことと考えられるかもしれない。遠い未来のことを思い煩う必要はなく、ただ現代の卑近な現象を論じていなければならない。しかし、思想家は、遠い未来のことを思い煩わなければならない。人類の文明の方向に明確なる予感を持たねばならないのである。今やさまざまに人類の危機が叫ばれる。まだ叫び声のみで、人類は本当に危機を身近なものとして感じていないのである。身近なものとして感じていたら、根本的に文明の方向を変えざるをえないはずである。しかし、危機を身近なものと感じていないために、まだ

人類は自分の安心感の中で安らっている。しかし、危機はもうそこまで来ているように思われる。一世紀後か二世紀後かわからない。あるいはほんの近い将来に想像も出来ないことが起こるかもしれない。砂漠の増大、森の死滅、チェルノブイリの事故、地球の温暖化、それらは確実に一つの方向を示しているように思われる。それは環境の破壊であり、生物、ひいては人類の滅亡である。こういう未来の歴史を前にして、われわれは人類文明というものを根本的に反省せざるをえない。何かが間違っている。しかし、この間違いの根は深いのである。人類が、それまで人類の共通の宗教であるアニミズムを捨てたとき、もはや樹神や動物神や天地自然の神に何らの尊敬も払わなくなったとき、そこから恐るべき人類の歴史は始まったのではないか。超越神や人格神の崇拜は、その恐るべき歴史の第一歩ではなかったか。もう一度人類が、この文明の歴史の果てにアニミズムの信仰を取り戻さねばならないのではないか。アニミズムの信仰は、新しい文明再建への第一歩ではないだろうか。

アニミズムの原理は、汎世界的な原理である。例えば、中国においては道教においてはもちろん、儒教においてもアニミズムの残存がある。インドにおいてはヒンズー教が、色濃くアニミズムの色彩をとどめている。また、韓国などに盛んなシャーマニズムも、アニミズムの変形と言って差し支えないであろう。汎世界的なアニミズムを復興する必要がある。

アニミズムはまた、ダーウィン以後の現代科学に通ずるところがある。ダーウィンの思想的功績は、人間から神の寵児としての位置を奪ったことである。人間は、バイブルに描かれているように、初めから神の寵児としてさまざまな動物と区別されて作られたものではない。人間は動物の進化の結果としてできたものであり、猿の一種に過ぎないものとなった。そして、その後の生物学は、生命の根がもともと一つであり、その大きな生命の根から植物ができ、動物ができ、人間がそれに属する哺乳類は永年の進化の結果であり、特に霊長類はごく最近出現したものであることを明らかにした。そしてこの生物の誕生は、宇宙の運動とつながっているのである。そのような現代科学の明らかにした世界観は、全てのものに霊があるというアニミズムの考え方に近い。霊を生命に置き換えたらほとんどそれは同じだと言える。

また、霊の死・復活の思想も決して迷信的なことではない。それは今では遺伝子の法則という形で明らかにされていることである。なぜ子供は親に似ているのか。なぜ、ある性質が子供に伝わらずに孫や曾孫に伝わるのか。それは、現在の科学によってやっと明らかにされた遺伝子の法則なのである。われわれは生きているうちに子供を産むので、子供は親の生まれ変わりだとは認め難い。しかし、おそらく平均寿命の短い昔では、孫の生まれてくるときには多くの場合、祖父母は既に死んでいたであろう。そのときに祖父母にそ

つくりな子供が生まれる。隔世遺伝という遺伝子の法則によって父母よりも一層祖父母に似た子供が生まれることがある。そのとき人は、それは祖父母の生まれ変わりであると考えた。それはごく自然な考えであろう。遺伝子は永遠に生き残り、次から次へと時代を越えて伝えられていくのである。霊の甦りということは信じ難いと思われるかもしれないが、霊を遺伝子に置き換えたならば、それは全く日常的に行われていることなのである。まさに遺伝子は不死であり、それは永遠に子から孫へ伝えられていく。普通の人間が不死にあずかるのはそういう形でしかありえないと思われる。

このように見ると、アニミズムは決して非科学的な思想ではない。むしろそれは、現代科学が明らかにした生命の真実と相通じるのである。それはむしろ、人間の心が神の寵児であり、他の動植物が持たない理性を持つという考えよりよほど科学的である。新しい人類の原理としてアニミズムが再考されるべきではないか。

(なお、本稿は昭和六十三年十二月七日に「東アジア知識人会議」において口頭発表したものを、改稿したものである。)